



TITLE:

# 支那製絲業の生産形態(一)

AUTHOR(S):

堀江, 英一

---

CITATION:

堀江, 英一. 支那製絲業の生産形態(一). 東亞經濟論叢 1942, 2(4): 910-925

ISSUE DATE:

1942-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128720>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學部  
東亞經濟研究所

年四回（二月、五月、八月、十二月）發行

# 東亞經濟叢論

第貳卷 第四號

昭和十七年十二月

附錄 南方文獻目錄

大東亞戰爭の本質……………	經濟學博士 谷口吉彦
支那私鑄考……………	經濟學士 穗積文雄
北支緊急物價對策の一斷面……………	經濟學士 德永清行
舊英領馬來に於ける印度人勞働者……………	經濟學士 福田省三
フランス領有前後の安南社會……………	經濟學士 鍵本博
支那に於ける工業化の基本問題……………	經濟學士 名和統一
支那の石炭鑛業經營について……………	經濟學士 菊田太郎
支那製絲業の生産形態……………	經濟學士 堀江英一
華僑と買辦……………	經濟學士 鈴木総一郎
再組織下にある最近の佛印經濟……………	經濟學博士 松岡孝兒

（禁轉載）

書肆 有斐閣 發賣

## 支那製絲業の生産形態（一）

堀 江 英 一

### 一 序 言

羊毛工業がイギリス資本主義の出發點を表徴するとすれば、製絲業はまさしく日本と支那の資本主義の出發點を表徴してゐる。羊毛工業が農村から農民を追放して農村の封建性を破壊したとすれば、製絲業は勞働集約度の極度にたかい養蠶業に農民をつなぐことによつて農民を農村につなぎとめ、農村の封建性の解體を阻止した。

製絲業は、かくの如く、日本と支那の資本主義の出發點を表徴するばかりでなく、日本と支那の資本主義の確立にとつて比類を見ない大きな使命を荷はされてゐた。日本と支那の貿易統計を一覽する者は、たゞちにこの使命を認めざるを得ないであらう。資本主義の後進國たる日本と支那にとつて、製絲業の創造した輸出代價こそ、資本主義體制輸入のための最も重要な基金であり、その盛衰は資本主義の移植と確立に強く影響する。

然しこの肝心の點で兩國は訣別する。かつて「絹の道」シルクロードを通じて羅馬に、また廣東十三行を通じて世界に絹を供給してきた支那は、同治七年（明治元年）五七、三〇〇擔の生絲を輸出したが、その最盛期たる民國一八年（昭和

四年)には一九〇・〇〇〇擔の生絲を輸出したにすぎず、この六一年間に三倍強を増大した。かつて、支那から白絲シライトを仰いだ日本は、その生絲輸出を明治元年の一、二〇八、四九九斤から昭和四年の五八、〇九五、〇〇〇斤へと四八倍強に増大した。かくして宣統元年(明治四二年)には支那の生絲輸出數量は日本に凌駕され、land of Seres の王冠は支那から日本に移つた。

支那蠶絲業の日本蠶絲業に對するかゝる相對的停滯はつぎの點に基く。支那の生絲輸出數量において廠絲(器械絲)が土絲(座繰絲)を凌駕したのは光緒二八年(明治三五年)であるが、日本ではすでに明治二七年に器械絲生産數量の座繰絲生産數量凌駕を完成し、輸出統計に器械絲と座繰絲の區別がはじめて行はれた明治三五年(光緒二八年)には器械絲輸出數量は座繰絲輸出數量の二二倍に達してゐた。かくして支那蠶絲業の日本蠶絲業に對する相對的停滯は支那における器械製絲業の日本における器械製絲業に對する相對的停滯、換言すれば資本主義化の停滯として把握される。

そこで、支那製絲業の生産形態を分析しようとする今の場合、支那における器械製絲業と土絲生産との對抗關係および對抗關係の基礎の分析が本稿全體の視角としてとりあげられねばならない。

## 二 生産の諸形態

支那製絲業において對抗する生産の諸形態そのものゝ具體的分析がこゝでの最初の主題となる。

### I 廠絲と土絲

支那製絲業の生産形態

うへに述べたやうに、支那における廠絲輸出數量の土絲輸出數量凌駕は光緒二八年（明治三五年）なしとげられたが、最近の民國二七年（昭和十三年）においても輸出數量に對し廠絲五八%、土絲（經絲すなはち再繰土絲を含む）三四%を占め、輸出部門に於てなほ土絲が廠絲に有力に對抗してゐる（表1）。

廠 土 絲 經 絲 小 計 其 他 計 合	輸 出 數 量 (千担)					輸 出 割 合 (%)				
	同治二二	同治二七	同治二八	民國一八	民國二七	同治二七	同治二七	同治二八	民國一八	民國二七
廠絲	二七・〇	四九・九	五〇・六	三三・〇	三・三	二四	元	四三	六	五
土絲	五八・六	四九・九	二五・五	八・八	六	四六	四	一四	三四	三
經絲	五八・六	四九・九	二五・五	八・八	六	四六	四	一四	三四	三
小計	五八・六	四九・九	二五・五	八・八	六	四六	四	一四	三四	三
其他	二五・九	二〇・五	一九・三	五・三	一・九	一五	二六	一七	三	八
合計	一〇六・六	二九・七	一九・八	一九・〇	五・六	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

(備考) D. K. Lieu; The Silk Industry of China, 1940, P. 265 より計出する。

廠絲生産數量の土絲生産數量凌駕なる指標は、器械製絲業の制覇を示す最も確實な指標であるが、現在のところこの指標作成の基礎となる資料を缺如してゐる。然し廠絲生産數量の土絲生産數量凌駕の年次が廠絲輸出數量の土絲輸出數量凌駕の前掲年次より遙かに遅れることは、廠絲が専ら輸出絲であり、土絲がより多く地遣絲であると云ふ事情から當然のことである。この目的のため利用されうる唯一の資料であると思はれる上原重美氏の民國一五—一六（昭和元—二年）の推算によれば、廠絲輸出數量の土絲輸出數量凌駕の前掲年次より四半世紀を経過

してゐるにもかゝらず、廠絲生産數量は全生産數量の四〇%に過ぎず、土絲が優位をしめてゐる(表Ⅱ)。

		生産數量(担)			生産割合(%)		
		廠絲	土絲	合計	廠絲	土絲	合計
		廠絲	土絲	合計	廠絲	土絲	合計
江蘇・浙江・安徽		四五、〇五〇	八〇、二〇〇	一二五、二五〇	三五	六五	一〇〇
廣東・廣西		四二、〇〇〇	二八、〇〇〇	七〇、〇〇〇	六〇	四〇	一〇〇
四川		三、〇〇〇	三二、〇〇〇	三五、〇〇〇	九	九一	一〇〇
山東		四、〇〇〇	三、五〇〇	七、五〇〇	五三	四七	一〇〇
其他		九〇〇	一三、三五〇	一四、二五〇	六	九四	一〇〇
合計		九四、九五〇	一五五、〇五〇	二五二、〇〇〇	三九	六一	一〇〇

(備考) 日本蠶絲業組合中央會編『支那蠶絲業大觀』一〇—一七頁の推算をつぎのやうに再整理して算出する。(a)原推算は各省の鮮繭生産數量の推算から直ちに生絲生産數量の推算を引出してゐるが、廠絲原料繭は他省に移出されることが多いので、この手續は正しくない。そこで「その他」を除き廠絲原料繭が流通し合ふ諸省を一括して、それらの諸省全體の生絲生産數量の合計を掲げた。但し「其他」に含まれる福建省から上海に移出されてそこで廠絲となる五〇担は「江蘇・浙江・安徽」に加へたが、その他にもかゝることがあらうけれども、その詳細は不明である。(b)「廣東・廣西」および「その他」に含まれる湖北省以外の諸省における生絲生産數量の内譯は説明されてゐない。そこで「廣東・廣西」の場合には、民國一六年における廣州港の輸出内譯に従ひ、廠絲六土絲四の割合に計算し、「その他」に含まれる湖北省以外の諸省の生産數量はすべて土絲に計入した。(c)原推算では「四川」の廠絲には三、五〇〇担のマニファクチュア製品が含まれ、「山東」の廠絲には二〇—三〇担のマニファクチュア製品が含まれてゐるが、ここでは「四川」の場合にはこれを土絲の項に移し「山東」の場合には結果に殆んど影響しないと考へて原推算通りにそのまゝにした。

上述した二つの學證の示すやうに、支那における器械製絲業の制覇は未だ完成されてゐないか、なしとげられ

てゐるにしても極めて最近のことに屬することが想像される。そこで、かく對抗關係にたつてゐる生産諸形態の具體的分析がなされねばならない。

## II 生産の諸形態

器械製絲業と土絲生産との對抗は、支那在來の生産形態たる養蠶農家の副業的繰絲に對する移植の生産形態たる器械製絲業の進出を基本内容とし、この兩生産形態の中間形態としてマニフakチュアが挾まつてゐる。そこで、この三つの生産形態の具體的分析を行ふにあたつて、この問題につき最も詳細にして最も信頼しうる前掲の『支那蠶絲業大觀』が主要な資料となる。この資料を補訂しつゝ再整理を試みたのが以下の叙述である。

### [I] 器械製絲業

A 移植と發展 支那における器械製絲業は、同治年間より光緒初年にまづ上海・廣東に移植・創設され、ついで民國年間に至り各地に普及すると云ふ順序を辿る。

上海における器械製絲業の移植は、歐洲人經營絲廠（器械製絲工場）の移植と「民族産業」としての絲廠の創設なる二過程を経過する。前者は、同治元年（文久二年）一〇〇釜絲廠設立・同治五年（慶應二年）一〇〇釜絲廠設立につぐ光緒四年（明治二年）佛人ブリューナー經營の一〇〇釜絲廠寶昌絲廠設立によつて成功を見た<sup>1)</sup>。従つて、寶昌絲廠設立の光緒四年をもつて絲廠移植成功の年次とすることが出来る。翌々年の光緒六年伊人經營絲廠・光緒七年一〇四釜裝置の怡和絲廠および公平絲廠の設立を見たが、かゝる歐洲人經營絲廠はその後發展を見ず、「民族産業」によつて繼承される。「民族産業」としての絲廠は、光緒七年（明治四年）黃佐郷設立の一〇〇釜裝置の

1) The Maritime Customs; Silk (Reprint of 1881 edition). P. 70.

公和永絲廠を嚆矢とし、この年次をもつて「民族産業」としての絲廠移植成功の年次とすることが出来る。公和永絲廠につぐ「民族産業」としての絲廠は、光緒二十二年（明治二十八年）設立の吳少卿の瑞綸絲廠・馬眉叔の信昌絲廠・葉澄の綸華絲廠であり、その後設立相繼ぐ。<sup>2)</sup> かくして、上海における器械製絲業は光緒初年その移植の成功を収め、光緒二十一年すなはちわが國で器械製絲業制覇のなつた明治二十七年に遅れること一年にして漸く發展の軌道に乗つたのである。

廣東における器械製絲業は最初から「民族産業」として出發する。南海縣人陳啓源が安南における佛人經營の器械製絲工場を模倣して、南海縣簡村に足踏器によるマニフアクチュアを設立し、のち蒸汽汽罐に代へたのを嚆矢とする。<sup>3)</sup> このマニフアクチュアから絲廠への轉換の年次は、光緒七年（明治十四年）出版の海關報告書『シルク』が「最初の工場は略々十年まへに創設された」と述べてゐるところより推して、同治一〇年前後のことであらう。かくして、廣東における器械製絲業は、上海より早く同治一〇年前後に移植され、光緒七年には二、四〇〇釜一〇工場に達し、光緒四年（明治十一年）上海の寶昌絲廠成功後發展の軌道に乗つた。<sup>4)</sup> そこで、廣東における器械製絲業は、上海に先立つこと七・八年まへなる同治一〇年前後に移植され、上海における移植の成功を見た光緒四年頃より發展の軌道に乗つた。

かくして、まづ上海・廣東に足場をつくつた器械製絲業が地方に普及したのは、光緒十九年（明治二十六年）海外から張之洞によつて移植された縑絲局の漢口設立<sup>5)</sup>を別とすれば、光緒三〇年（明治三十七年）周舜卿の無錫に設立した裕昌絲廠<sup>6)</sup>を嚆矢とするが、その多くは民國以後上海および日本から移された。表Ⅲは、上海における器械製絲

2) 錢承緒編；經濟研究，第1卷第9期（民國29年），10頁。

3) 5) 6) 楊太金編；現代中國實業誌（民國22年），111頁。

4) Silk, P. 151.

7) 顧毓方；無錫工業事情（編譯彙編第73編，原著無錫之工業，民國22年），40頁。



業がすでに民國初年に多數に達してゐるに反し、その他の器械製絲業の發展が専ら民國以後のことに屬し、しかもその進度が上海のそれを凌いでゐることを示してゐる。器械製絲業の發展における上海とその他の地方とくに浙江省との對比は、そのまゝ上海・廣東と四川・山東などの諸省との對比に妥當する(表Ⅲ)。

Ⅲ		工場數							
合	計	江蘇省				其他			
		上海	無錫	蘇州	小計	浙江	江蘇	山東	四川
民國三	六〇	六五	一四	七二	一〇四	一〇六	一〇五	六三	二三
同 八	六五	一四	一八	四四	一〇六	一〇五	六三	二三	二三
同 一三	七二	一八	四四	一〇四	一〇六	一〇五	六三	二三	二三
同 一八	一〇四	一〇六	一〇五	六三	二三	二三	二三	二三	二三
同 一九	一〇六	一〇五	六三	二三	二三	二三	二三	二三	二三
同 二〇	一〇五	六三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三
同 二一	六三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三
同 二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三

(備考) 民國三二一年は『支那蠶絲業大觀』二三五—六頁、『經濟研究』第一卷第九期(民國二九年)九七—八頁の表と國際貿易局編『中國實業誌浙江省』(民國二二年)庚三九—四〇頁の敘述を對照して作成し、民國二三年は『中國經濟年鑑』民國二五年第三編E八三—八五頁より作成する。なほ支那の絲廠は操業不確實のため、同一の調査でも調査月日の異なるに従つて、絲廠數および釜數に著しい相異を生ずる。この點注意を要す。

支那における器械製絲業は、略々わが國と同じ時期に移植されながら、廣東を除けばわが器械製絲業の制覇すでになつた明治二七年の翌年たる光緒二一年(明治二八年)漸く發展の軌道に乗り、民國(大正元年以後)初年以來漸く地方化傾向を示した。停滞性がうかがわれる。

B 地域的分布 さきに支那における器械製絲業が民國(大正元年以後)初年以來漸く地方化の過程をはじめ

たことを指摘したが、この地方化傾向は著しく停滞してゐる。民國二〇年（昭和六年）頃の調査によれば、全支の絲廠數二九一のうち、江蘇・浙江兩省二〇二・廣東省五八・上掲三省合計二六〇で、この三省で全數の八〇%をしめ、四川省一九・山東省九・湖北省四・上掲三省合計三二で、残りの二〇%をしめ、著しい省別偏倚を示してゐる。然しさらに立ち入つて縣別分布を見ることによつて、この偏倚の意味をあきらかにすることができる。江蘇・浙江兩省二〇二のうち、上海一〇四・無錫六六・合計一七〇をしめ、廣東省五八のうち順德・南海兩縣五七をしめ、上掲三地方だけで二二七、すなはち、全數の七七%をしめて居り、その他の絲廠も殆んど浙江省杭州・四川省重慶・山東省周村・湖北省漢口に集中されてゐる。<sup>8)</sup> かくの如く、支那における器械製絲業は上海・無錫・順德・南海に著しく集中され、地方に分布してゐるものも殆んど重要都市に集まつてゐる。

支那における器械製絲業のかゝる地域的集中性は、器械製絲業が原料繭蒐買のため交通の要衝に位置すると云ふ事情に基くばかりでなく、より多く次の二事情に基く。第一に、器械製絲業が農村に廣く普及してゐる土絲生産を驅逐することができず、従つて農村に深く深入することができないと云ふ事情。第二に、器械製絲業に機能してゐる「民族資本」が商業都市の前期資本と全き癒着關係にあり、後者をはなれて自立することができないと云ふ事情。約言すれば、器械製絲業における「民族資本」が未だ産業資本として自立することができないと云ふ事情に基く。

#### III マニファクチュア

A、創 設 器械製絲業の支那移植はまた足踏器とマニファクチュアを支那にもたらしした。足踏器は技

8) 楊太金編；前掲書，126—144頁より計出。

術史的に想像されるやうに、わが國の奥州式座繰器や上州式座繰器のやうな手動式の座繰器から器械製絲業に使用されてゐる工場用座繰器へ轉化する中間項をなす勞働手段ではなく、支那ではわが國とおなじやうに、工場用座繰器から模倣・創造された。經濟史上養蠶農家の副業的繰絲から器械製絲業への轉換形態たるべきマニユファクチュアも、それと同じやうに、支那では器械製絲業から模倣・創設された。従つて、こゝでマニユファクチュアと云ふ場合、それはかゝる歴史的意味をもつ足踏器裝備のマニユファクチュアをさしてゐる。

[A] 足踏器の創造 上海附近における足踏器創造の年次はあきらかでないが、光緒七年（明治十四年）出版の前掲『シルク』に土絲生産のための道具として足踏器を掲げてゐることから推して、當時すでに足踏器が在來の座繰器を驅逐してゐたことをうかゞひうる。廣東における足踏器の創造は、すでに述べたやうに、陳啓源が安南における佛人經營の器械製絲業を模倣して、足踏器裝備のマニユファクチュアを設立したのはじまる。従つて、足踏器創造の年次は少くとも同治一〇年（明治四年）以前に遡る。かくして、足踏器の創造は、揚子江デルタおよび珠江デルタでは器械製絲業移植と時を同じくして創造され、普及した。

その他の地方、たとへば四川省・山東省では民國（大正元年以後）に降る。四川省では汽罐の取寄せ困難のために、日本留學生や當業者が汽罐を要せざる器械製絲業、すなはち、足踏器裝備のマニユファクチュアを企圖し、その最初の試みが民國元年官費四萬元を費し、女生徒一五〇人收容の寄宿舎をそなへて成都に創設された省立模範絲廠である。<sup>10)</sup> 山東省でも同じく、民國初年設立の器械製絲工場裕厚堂絲廠と相前後して「固定資本を要せざる器械製絲業」として創造された。<sup>11)</sup>

9) Silk. P. 56-58, および Fig. 23.

10) 蠶絲業組合中央會編；支那蠶絲業大觀（昭和4年）832-837頁。

11) 蠶絲業組合中央會編；前掲書，629頁。

かくして、足踏器は支那においては工場用座繰器に對抗すると云ふ性格をその創造のはじめから賦與されてゐる。労働手段としての足踏器のかゝる性格と足踏器のもつ孤立性とのため、足踏器はそれを創造したマニユックチュアから廣く養蠶農家の副業的繰絲のための労働手段として普及し、その器械製絲業に對する攻撃武器となつた。

[B] マニユックチュアの創設 マニユックチュアの創設については、足踏器の創造と關聯して述べたのでこれ以上説明する必要はない。

唯一の注意すべきことは、足踏器が養蠶農家の副業的繰絲の労働手段となつた場合、マニユックチュアは自己と同一の繰絲器をもつ養蠶農家の副業的繰絲とより進んだ繰絲器をもつ器械製絲業との二つの生産形態の挾撃に遭ひ、動搖を免れないことである。かくして、支那の製絲業においてマニユックチュアが支配形態になつた時代は想像することができないであらう。

B 地域的分布 揚子江デルタは支那における器械製絲業の最大の中心地であるとともに、土絲産額の七〇%を出してゐると云はれてゐる。とくに浙江省はかゝる土絲生産地域として著名であるが、マニユックチュアは器械製絲業と養蠶農家の副業的繰絲の挾撃に遭つて例外的存在たるに過ぎない。そこで、廣東省・四川省・山東省におけるマニユックチュアを見る。

廣東省における器械製絲業の中心地順德縣では、民國一五——一六年（昭和元——二年）に絲廠九を有した容桂に二四のマニユックチュアがあり、また民國一八年（昭和四年）には「この縣には一三五の絲廠があり平均四〇〇釜以

上をそなへ、六五、〇〇〇人以上に仕事をあたへてゐる。また三〇釜以上の足踏製絲場は少くとも二〇〇あり、少くとも六、〇〇〇人を使つてゐるが、さらに三〇釜未満のものが多數<sup>13)</sup>存在した。また同年高要縣肇啓にも數ケの小規模マニュファクチュアが見られた。<sup>14)</sup>かく廣東省にはマニュファクチュアがかなり存在するが、それは器械製絲業に比すれば十分の一にも足らない労働者をつかつてゐるにすぎない。

四川省では民國一五—一六年（昭和元—二年）における生絲生産數量三五、〇〇〇擔のうち、鐵車絲廠（器械製絲工場）生産數量三、〇〇〇擔・木車絲廠（マニュファクチュア）生産數量三、五〇〇擔で、養蠶農家が殘餘を繰絲して居り、生産數量においてマニュファクチュアは器械製絲業を凌いでゐた。また同年には一八工場と四、四三一釜の絲廠が存在したが、マニュファクチュアは絲廠釜數の二倍に達する八、〇五〇釜をもつてゐた。即ちつぎの如くである。<sup>15)</sup>

潼川	五、〇〇〇釜	經濟（二〇〇釜）合羽生太（四〇釜）祐記（六〇釜）その他數釜より二〇—三〇釜のもの一、〇〇〇餘戸。
順慶	一、〇〇〇釜	同德（三二〇釜）六合（三四〇釜）德合（二四〇釜）文華（二〇〇釜）美利（二〇〇釜）ほか數戸。
保寧	四五〇釜	泰豐（二〇〇釜）祐寧（六〇釜）新盛（五〇釜）祐泉（四〇釜）蜀錦（四〇釜）保泰（四〇釜）など數戸。
成都	四五〇釜	德新（一九〇釜）錦雲（一〇〇釜）錦江（八〇釜）協又（八〇釜）。
西充	三〇〇釜	新興（一三〇釜）ほか一〇戸餘。
綿州	三〇〇釜	一〇餘戸。
重慶	二〇〇釜	三戸。
川南地方	二〇〇釜	五戸。

13) 14) The Silk Industry in Kwangtung Province (The Chinese Economic Journal, vol. 5), P. 610, 615.

15) 蠶絲業組合中央會編；前掲書，867，772，832—838頁。

射	洪	九〇釜	榮織(九〇釜)。
安	岳	六〇釜	淑和(六〇釜)。
合	計	八、〇五〇釜	

かくして、四川省におけるマニファクチュアは、その生産數量と釜數において器械製絲業を凌ぐばかりでなくその規模においても充分對抗しうるのである。

山東省においてもマニファクチュアは器械製絲業に對抗してゐる。民國一五—一六年(昭和元—二年)における生産數量六、五〇〇擔のうち、廠絲生産數量二、二〇〇擔・小鑛絲(マニファクチュア製品)一、五〇〇擔で、残りの二、七〇〇擔が養蠶農家の副業的生產數量であり、マニファクチュアは生産數量において器械製絲業より僅か劣るにすぎない。また同年二、〇九二釜をそなへた一〇の絲廠が存在したが、マニファクチュアは一四八あり、絲廠釜數の二倍に達する五、四〇〇釜をそなへてゐた。つぎの通りである。<sup>16)</sup>

臨	胸	一四〇戸	五、〇〇〇釜	一、三〇〇擔	周	村	二戸	一〇〇釜	四〇擔
青	州	六戸	三〇〇釜	一五〇擔	合	計	一四八戸	五、四〇〇釜	一、四九〇擔

マニファクチュア一戸當りの平均釜數は三五釜前後となつてゐる。

上述のやうに、マニファクチュアは揚子江デルタを除き、廣東省・四川省・山東省に廣く普及してゐるが、然しその地域的分布の分析は次の事實を明確に立證してゐる。器械製絲業が發展してゐる地域ではマニファクチュアの比重は低く(揚子江デルタ・珠江デルタ)、反對の地域では反對の事情を呈してゐる(四川省・山東省)こと、これで

16) 蠶絲業組合中央會編：前掲書，629—630頁。

ある。かくして、マニファクチュアは器械製絲業に對する強力な對抗形態たりうるものでなく、後者によつて容易に制壓されることがうかゞわれる。支那の製絲業においては、器械製絲業と養蠶農家の副業的繰絲とが對立する基本的生産形態である。

### [III] 養蠶農家の副業的小營業

養蠶農家が手動式座繰器を用ひて副業的に自己の産繭を繰絲すると云ふ生産形態は、製絲業における支那在來の唯一の生産形態であつたと想像されるが、手動式座繰器に代ふる足踏器をもつてしたこの生産形態は、すでに表示したやうに、現在もなほ根強い生命力を維持しつゝ器械製絲業に對抗してゐる。

A 形態 叙述の簡單を期するために、土絲生産の最大中心地たる浙江省の事情に基いて、この生産形態の形態規定を行ふこととする。

揚子江デルタ、とくに浙江省では蠶戸（養蠶農家）が絲戸（土絲生産者）を兼ねることを原則とする。従つて土絲原料繭は自己の産繭のうちから自給されるが、この原料繭の自給こそ養蠶農家の副業的繰絲を獨立小營業として維持せしめてきた物的基礎である。然し絲戸を兼ねる養蠶農家はその全産繭を土絲原料繭に供するのでなく、繭價低く絲價割高なれば土絲原料繭の保留割合多く、逆の場合には反對の結果になると云ふやうに、産繭のうちにしめる土絲原料繭の割合は常に變動を免れないが、浙西地方では産繭の略々五〇%が土絲原料繭として保留され土絲生産の本場たる吳興縣では繭販賣價額は土絲販賣價額の僅か十分の一にすぎない。<sup>17)</sup>尤も江蘇省句容・江北地方や安徽省當塗地方では養蠶を兼營しない絲戸があり、こゝでは賃挽制度や小規模マニファクチュアが見られる。

17) 中國經濟統計研究所；吳興農村經濟（民國27年），29頁。

支那の養蠶農家は、一方に絲廠原料繭の生産者として器械製絲業の基礎を維持し、他方に土絲生産者として器械製絲業の發展を制限する、と云ふ二性格を帯びてゐる。

かゝる絲戸のもつ足踏器の臺數は、絲戸の擁する家族員數に依存する。浙江省吳興縣では、絲戸は平均四臺をもつと報告され、<sup>18)</sup> また一臺八〇%・三一八臺二〇%と稱されてゐる。さらに浙江省硤石・長安・崇德・杭州地方では大抵一臺宛であると稱されてゐる。上述の報告から推して、各絲戸は通例精々のところ二・三臺の足踏器を用ひて家族労働で繰絲にあたつてゐることが想像される。

かくして、養蠶農家は家族労働と二・三臺の足踏器により副業的小營業として自己の産繭を繰絲する。この生産形態のもつ強味は、「養蠶農家は加二費用に全く意をとゞめず、自家勞力を價値に計上せず、薪炭また農家が所有するため、鮮繭一擔三〇元、これから土絲一三〇兩をうることもできるとすれば、土絲價格三八元となり、屑物收入でもつて薪炭の消耗を補ふことができる」<sup>19)</sup>と云ふ如き「自家勞力を價値に計上しない」點にある。たゞそれが鮮繭繰絲または鹽漬・天日による殺蛹繭繰絲のために、繰絲期間を著しく制限される。

**B 地域的分布** 前掲表IおよびIIから想像されるやうに、養蠶農家の副業的小營業は支那の全産繭地域に普及し、なほ器械製絲業に充分對抗する生産形態である。

揚子江デルタでは、浙江省が土絲生産の本場であり、民國二二年（昭和八年）には廠絲四、二五〇擔の二〇倍に達する八五、二六〇擔の土絲が生産されたが、<sup>20)</sup> それはすべて養蠶農家の副業的繰絲であり、この生産形態が器械製絲業より遙かに優勢である。また浙江省吳興縣では養蠶を営む絲戸が農家戸數の九〇—一〇〇%をしめ、浙江

18) 中國經濟統計研究所；前掲書，12頁。

19) 國際貿易局編；中國實業誌浙江省（民國22年），庚46の1頁。

20) 中國實業誌浙江省，庚46・46の2頁。



省の硤石・長安・崇德・杭州では養蠶農家が農家戸数の六〇—八〇%、養蠶をかねる絲戸が蠶戸の八〇—九〇%をしめ、養蠶農家の副業的繰絲の普及と旺盛を想見せしめる。

珠江デルタでは、養蠶業は熱帯蠶業として通例年七回の收繭を見るため、養蠶農家は副業的繰絲のための餘暇を有せず、副業的小營業の普及を見ない。従つて廣東省西南部や海南島を別とすれば、廣東蠶絲業の中心地たる珠江デルタにおけるこの生産形態は僅かにその痕跡をとどめるにすぎない。<sup>21)</sup>

四川省では、前述した如く、民國一五—一六年（昭和元—二年）に養蠶農家の副業的繰絲は廠絲三、〇〇〇擔の一〇倍に達する二八、五〇〇擔であり、また五、八五八釜をそなへた二〇の絲廠の存在した民國二三年（昭和九年）に「製絲は本來家庭工業であり、殆んどすべての家庭が數臺の木製繰絲器をもつて居り、……その總數は全省で二〇、〇〇〇臺以上に達し、それは人力で運轉されてゐる。繭作の極めて旺盛な三臺には木製繰絲器五、〇〇〇臺以上が用ひられてをり、繭の供給多く製絲に必要な他の材料の豊かな順慶・重慶・閬中にもまた多數見出される<sup>22)</sup>」と報告され、その盛況が想見される。

山東省でも、前述の如く、養蠶農家の副業的小營業の製品たる大繅絲は、廠絲二、二〇〇擔を凌ぎ二、七〇〇擔に達し、この生産形態の根強さを想見せしめる。<sup>23)</sup>

上掲の舉證によつて、廣東省を別として、揚子江デルタでは浙江省における養蠶農家の副業的繰絲が江蘇省中心の器械製絲業に對抗し、四川省・山東省でもより強くこの對比が維持されてゐる\*。

\* 養蠶農家の副業的繰絲は足踏器と云ふ不完全な繰絲器によるばかりでなく、その繰絲法も「一粒宛添緒を行ふにはあらで

21) The Silk Industry in Kwangtun Province (The Chinese Economic Journal, vol. 5), P. 608 ff.

22) Sericulture in Szechuan (The Chinese Economic Journal, vol. 15), P. 542.

四五粒の緒絲を纏めて一時に添緒するのであるから織度の不齊なる怪しむに足らぬ。加へて切斷しても繋がないし、集緒器の不完全並に大枠回轉の速いこと等によつて類節の多いことは免れない<sup>23)</sup>と云ふ欠點をもつてゐる。そこで、土絲生産の生産形態とその亂暴な緒絲法を變革しないで、土絲のもつこの欠點を除き廠絲に對する對抗力を増大せんとしたのが再練土絲たる經絲で、宣統元年(明治四十二年)はじめて輸出を見、同三年海關統計に掲出された。

再練工程は二つの過程、すなはちわが國の紡車に似た小車で大認を錘または小枠にまきとり、ついでこれを大車によつて廠絲の認と同じ大きさの大枠に再練すると云ふ過程によつて行はれ、この間に絲條斑と類節を除く。

この再練工程の生産形態には二つある。(a)問屋制工業。まづ浙江省南潯と江蘇省震澤、現在では震澤にのみ行はれてゐる形態から述べる。再練「問屋」たる經絲行は各地の絲行を通じて土絲を買ひ集め、これを前述の大車を所有する軸頭に再練を請負はしめ、軸頭はさらに附近農家をして錘または小枠にとらしめ、軸頭はその大軸によつて錘または小枠から大枠に再練して、經絲行に返す。山東省では絲廠がこの經絲行と軸頭の機能を兼ね行つてゐる。<sup>24)</sup>(b)マニファクチュア。四川省の擔經絲廠<sup>25)</sup>や最近では浙江省湖州・杭州・江蘇省蘇州などに設立された擔經廠または乾經廠は前述二過程を一作業場で行つてゐる。

- 23) 蠶絲業組合中央會編；前掲書，684—687頁。  
24) 蠶絲業組合中央會編；前掲書，382頁。  
25) 蠶絲業組合中央會編；前掲書，686—7頁。  
26) 蠶絲業組合中央會編；前掲書，850—852頁。